

人とのつながりで地域を興す



小箱 駿太 (こばこ しゅんた)

1994年9月生まれ、札幌出身。関東の大学へ進学し、卒業後は札幌で6年間小学校教員として勤務。その後、スポーツの世界に飛び込むため、教員を退職。2023年から白老町地域おこし協力隊としてスポーツの振興に務め活動を行っている。

【協力隊に応募した経緯】

海と山がすぐ目の前に広がり、自然豊かな白老町。一次産業の漁業や畜産業が盛んで、白老牛や虎杖浜^{こじょうはま}たらこは北海道や全国でも名産として知られています。

白老町に来る前年度まで、私は札幌市で小学校の教員をしていました。ハンドボールを広めたい、強くしたいとの思いで一念発起し、6年間勤めた教員を退職。総合型地域スポーツクラブ「サフィルヴァ」からの依頼でハンドボール部門を任せていただき、チームの管理・運営をしていました。

それから3カ月ほど経ったころ、白老町とサフィルヴァが「スポーツ振興」を目的として一緒に事業に取り組むことになりました。また、同時期に白老町でスポーツ担当の地域おこし協力隊を募集しており、それを知ったクラブの代表から募集を勧められました。スポーツの世界で仕事をしてみたいと考えていた私は、迷わず応募を決断。無事採用が決定し、いざ白老町へ。

準備の期間は半月ほどしかありませんでしたが、家探しや諸手続きを急ピッチで済ませ、2023年8月から、晴れて地域おこし協力隊となりました。

食べ物に恵まれたこの町のことを、来るまではよく知らず、スポーツに関して言えば、どんな歩みを進めてきたのか、正直全く知りませんでした。調べてみると過去にスポーツ都市宣言をしており、町オリジナルの「しらおい元気まち体操」がラジオ体操のように役場をはじめとした町内各所で浸透しています。そのほかにも野球が盛んだった時期があり、社会人野球や中学校の全国大会で優勝したことがある町だと白老町に住み始めてから知りました。白老町は「野球の町」と言われるほどで、その当時のことをよく町民の皆さんが熱く語ってくれます。

ただ、かつてのようにスポーツで栄えたこの町のスポーツ熱も、今では下火になってきており、あらゆるスポーツの行事が縮小、廃止され、ほかにも中学校の野球部が少子化の影響でなくなるなど、町民がスポーツを楽しめる場が徐々に少なくなっています。さらには、65歳以上の割合が50%に迫り、町民の約二人に一人が高齢者という状況です。

【地域おこしとしての活動】

そんな環境を変えていくために行っている私の活動は主に2つあります。1つ目は小学生・幼児を対象にした「マルチスポーツスクール」の立ち上げと運営です。「マルチスポーツスクール」とは？と思う方もいらっしゃると思いますが、これは幼児と小学生を対象に、さまざまな種目を経験できるスクールです。スポーツを始めるきっかけを作ったり、子どもたちの運動能力の基礎を培ったりすることを目的として行っています。近年、スポーツ庁においても推奨している活動形体であり、全国でも同じような活動を行っている総合型地域スポーツクラブが増えてきています。

サフィルヴァが札幌で行っていたことをベースに白老町でも立ち上げ、似たような形で行っています。札幌との違いは、地域の人材を生かしている部分です。地域のスポーツクラブ・少年団で指導をしている指導

者に講師として来ていただき、そうすることでこのスクールからあらゆる競技に興味を持ってもらい、すぐに少年団や地域クラブにつなげられるという利点があります。スポーツを始める最初の間口として、これまで多くの子どもたちに運動の機会を作ることができました。

2つ目は「多世代へのスポーツをする機会の提供」です。これまで小さきさまざまな規模のイベントやスポーツ体験の講座などを行っています。参加してくれるのは幼児から80歳を過ぎた高齢者まで、幅広い世代に渡ります。その内容は、高齢者の運動教室、1時間から2時間程の軽スポーツ講座、1日まるごと使った子どものスポーツイベント、誰でも参加可能な多世代参加型の町民運動会などです。参加者の年齢差があるイベントも数多くありますが、小学校の教員だった経験を生かし、どの程度の強度で行えば良いか、また、どうすれば安全に楽しく運動に親しんでもらえるかを常に考えて取り組んできました。1年目に行った活動を評価していただき、2年目、3年目にも繰り返し呼んでもらえるなど、継続して依頼をいただくことも増えてきました。

【やりがい】

教員として勤めていた時は、子どもたちの成長を日々見られること、クラスメイトと協力して目標に向かっていく素敵な姿を見られることが楽しみでした。この白老町に来てから、マルチスポーツスクールなどを通して、教員時代と同じように子どもたちの成長の手助けをしていくことを意識しています。また、数々のイベントやたくさんの方々との関わりを通して幼児や保護者、高齢者の笑顔を見る瞬間は、何事にも代え難い経験になっています。

自分だけではできないこともたくさんありますが、役場の皆さんや体育協会の皆さん、そして地域の人たちがいつも助けてくれます。時には子どもたちに助け

てもらふことすらあります。今では町を歩けば、いつも誰かに声をかけていただき、応援してくれます。そうした出来事は、苦労の中で積み重ねてきた行動の結果なのだと、感謝の気持ちと自分の自信にもつながっています。多世代の笑顔を見ることができるとは、とても豊かで幸せな瞬間です。

【困ったこと・今後の展望】

たくさんの方々との縁をいただき感謝ばかりですが、活動をしている中で難しさも感じています。3年間という時間の縛りがあるなかで、任期終了後を見据えながら活動していかなければなりません。白老町に住む人たちのためにスポーツを通して今後も関わり続けていきたいという思いは確かにありますが、スポーツという分野はお金になりにくいということも常々感じています。スポーツの世界は思った以上に「ボランティア」や「お気持ち」で賄う部分が多く、そこをどう収益化できるかを考え事業化していくのか。最初に寄付で賄うことができて、その先誰かに、どこかに頼る形ではなく、自走できるようにしていかなければなりません。イベントやスクールを行いながら、今後も続いていくように、未来を見据えながら動いていかなければならないのです。これまで培ってきた文化や伝統を重んじる方々のことも大切にしながら、今の白老町の生活や実態に合うように0から1を作っていくことに、とても難しさを感じています。

今後のミッションも基本的には変わりません。子どもたちから高齢者まで、すべての人が運動に親しめる環境を整えていくことです。「白老ではできない」ことがなくなるように場を作り、笑顔になってもらう。子どもたちが笑顔になれば、その周りの人たちも笑顔になってくれると信じています。まずは自分のできることから一つずつ取り組み、今ある活動を継続しながら少しずつ笑顔の輪を広げていくことができるように進んでいきたいと思っています。



マルチスポーツスクールの活動風景



ノルディックイベント